2019年8月4日　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝 NO.1079
聖　書　　レビ記 19：18／ルカによる福音書 10：25～28
説　教　『 愛いろいろ 』

イエスと律法学者との対話を導入部とし(ﾙｶ 10:25~28)、その後「善いサマリア人の譬え」が語られる(10:30~36)。今日はこの導入部に注目したい。
律法学者は「永遠の命を継ぐには何をすべきか(10:25)」と問い、イエスは「お前さんはどう考えているのかね」と問いを投げ返す(10:26)。律法学者は、神と隣人への二つの愛の律法(申命 6:5,ﾚﾋﾞ 19:18)で答えた(ﾙｶ 10:27)。イエスは「いいじゃないか、そのようにせよ(10:28)」と命じた。
律法学者は隣人の不在に、はたと気づかされたのか「自分の隣人とは誰か(10:29)」と問い、イエスは善いサマリア人の譬えを語って、焦点は「隣人愛」一つに絞られる。

注目された隣人愛(ﾙｶ 10:27)は、「自分自身を愛するように隣人を愛せ(ﾚﾋﾞ 19:18)」という律法。世の常識でも律法でも、自分への愛はまったく自明のこととされている。しかし実際、これらは分けられるのか。隣人愛といっても、他者の内に自分愛の利害が入り込んではいまいか。
いや、こういう意味か。隣人への愛をしっかり意識させて、利己的に働く自分愛を抑制しているのかもしれない。

イエスは言う。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい(ﾏﾀｲ 7:12)」。「自分のように愛する」とは相互のものであり、関係が閉じて利己的になる自分愛とは違う。私なりに解すれば、隣人愛を相互に交換することは、その基である神の愛を己が身にひしと覚えること。

聖書が神への愛と隣人愛を求めるのは(ﾙｶ 10:27)、「愛」らしきものが多分に利己的で、神の愛にさえそれを投影するから。
神学の某先生は言う。「愛の律法は、人間を罪から解放するために神から差し出された福音に他ならない」。神への愛と隣人愛(愛の律法)によって、閉じていた自分愛が開かれ、罪から解放される、と。ルターも「隣人愛があるところでは自分愛が消滅し、人は罪から解き放たれる」といったことを記している。「隣人を自分のように愛する(10:27)」ことは罪からの解放なのだ。
イエスは律法学者に言った。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる(10:28)」。

神への愛、隣人愛、自分愛、三つの愛を思い巡らせ、聖書の地平に一応着地した。でもまだ愛の微妙さに関して、もうひと巡りできるのではないか。
自分愛と利己心を同じものとして見たけれども、ある心理学の先生は「利己心は自分愛の不足から生まれる。自分自身にしか関心がない利己的な人間は自分の空虚感を埋め合わせようとごまかしている」と語っている。
あっ、これは分かる。であれば、偉い神学者が言うように、隣人愛で自分愛を克服したとしても、それで片づくものではあるまい。

「己のごとく汝の鄰を愛すべし(ﾚﾋﾞ 19:18 文語訳)」。古びた言葉で直感が働く。私の隣人愛によって私の自分愛は満ちる。私の偏りや欠けまで愛されているがゆえ、他者の偏りや欠けを愛しうる。罪人がごまかさず罪人たる自分を愛せるのは、聖霊によって愛がこの罪人に注がれているから(ﾛﾏ 5:5)。

「心を尽くして～主を愛し、隣人を自分のように愛せ(ﾙｶ 10:27)」。注がれている愛を球にして、神と隣人と「三角キャッチボール」をする。投球するほどに、捕球するほどに、愛の現実が形になる。

「～隣人を愛しなさい。わたしは主である(ﾚﾋﾞ 19:18)」。愛への踏み出しを主が見守っておられる。

★

≪おまけのひとこと≫
Catch ball　なぜ throw ball ではないのか　捕球よりも投球の方が能動なのに　いや　バシッという音で掌が痺れる捕球にこそ信頼は醸成される　隣人愛もまた　投げるより受ける側から生まれる